

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 19 年度派遣報告書

—インドネシア・Hasanuddin 大学、インドネシア語、H19. 1. 23-H19. 3. 31—

平成 19 年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程二回生

西嶋謙治

### 自身の研究テーマについて

私の研究テーマは小農によるカカオ生産の経済的役割を食用作物である稲作との関係から明らかにすることである。

私の調査対象地であるルウ県では輸出用の商品作物としてカカオを生産する小農が非常に多く、カカオ生産は彼らの大きな収入源となっている。現在は、生産されるカカオが他国や国内の他地域のものに比べ、低品質であることや木の老朽化、病害虫の発生など様々な問題が指摘されている [Akiyama ほか 1996]。

1980 年代ごろから始まった急激なカカオ生産の増加により、新しい土地開墾が行われたり、それまで生産されていた作物からの転作、それに伴う労働投入パターンの変化等を農家に促すことになった。本来、この地域では米の生産量が高く水田とカカオ農園双方を保有している農家が多くみられる。そのような農家では食用作物である米を生産しながら、輸出用作物であるカカオを生産して生計を立てていると考えられる。

私の研究では、以上のような状況下で同地域の小農はいかなる選択を行うことで自らの利潤安定化および最大化を図っているかということを中心にしたいと考えている。経済危機下において農家は、輸出作物の販売により多大な利益を得る一方で、米の価格や農業用の投入財の上昇により生活を圧迫されたとされている [Sunderlin ほか 2001, JBIC 1999]。そのため、水田を保有する各農家が緊急の危機に対し、利潤安定化のためにとった選択行動やそのときカカオおよび水田がそれぞれどのような役割を担ったかを明らかにすることは、同地域における小農の経済状況を理解する上で大きな意義があると考えている。輸出用作物のカカオと食用作物の米という対比で小農の経済・社会状況をミクロレベルで記述した先行研究は少なく、その視点からこの地域のカカオ生産の果たす経済的役割を考察していく。

### 研修言語の概要

インドネシア語はインドネシア共和国の国語として 1945 年憲法の中で規定されており、広大な地域にわたるこの多民族国家の統合のために大きな役割を果たしている。多くのインドネシア国民は自らの地域の母語を持っており、小学校からインドネシア語教育を受けるため、インドネシア語は第二言語だといえる。

インドネシア語はすべてアルファベット表記で、複雑な発音も少なく、初心者にはとっつきやすい言語といえるだろう [小川 1993: 18-19]。

## 語学研修の内容について

このプログラムで、私はインドネシア語の授業を Hasanuddin 大学・文学部・インドネシア語学科において受講した。私の授業を担当したのは、パ・ルクマン (Pak Lukman)、イブ・アスリアニ (Ibu Asriani)、パ・カハル (Pak Kahar)、の三名であった。

授業は教師と私の 1 対 1 形式で、1 コマ約 90 分間で、一日に一コマ、1 週間に 4~5 回行われ、私は合計 35 回受講した。私が受講したコースは、初級と中級 I の二つで、それぞれ 15 回と 20 回であった。それぞれのコースの最後の授業ではテストが行われた。また中級 I からはイブ・アスリアニ (Ibu Asriani) がリーディングを、パ・カハル (Pak Kahar) が文法を担当した。

授業は無料で配布された教科書によって進められた。教科書と同じ内容の DVD を使用する教師もいた。授業は時折確認のために英語が用いられる場合がある以外は、ほぼインドネシア語だけで行われた。今後、この語学研修を受けるものは、授業を受けるまでに一定程度インドネシア語の学習、特にリスニング力を向上させておく必要があるだろう。また、私の受けた初級コースは基礎にあたるものなので、それ以前に一定程度学習したものであれば、その内容を理解するのは容易である。中級 I からは、単語量や内容量自体も増加するため、予習して授業に臨むことが望ましい。それにより理解も深まるし、講義がスムーズに進行する。

授業は主に午前の時間帯を利用して行われることが多かったが、時折変更されることがあり、その連絡は携帯電話を通して伝えられた。

総じて、同大学における語学研修により、初歩レベルに近かった私のインドネシア語の向上は大きく向上した。

## 研修期間中に印象に残った体験や経験

私は同大学の先生の紹介により、文学部・日本語学科の学生の自宅にホームステイさせていただくことができた。

語学の授業と並行して、気軽に質問したり、会話することができる学生が近くいたことは、語学力の向上という点で大変有意義であった。それに加えてホームステイという環境の中で、同世代のインドネシア人の友人ができたこと、同地域の食文化や家族内の関係性、大学生の生活を、身をもって体験できたことは自らの人生にとっても大きな財産になった。

## 目標の達成度や反省点について

当初の目標であった研究のための語学力の向上という点では、ある程度満足いく結果を得られた。特に、博士予備論文執筆のため予定している聞き取り調査の実施に必要な最低限のインドネシア語の会話能力は得ることができた。

同言語の読解能力も一定程度向上し、文献などを読むのも、研修前よりははるかに速くなった。

しかし、どちらの能力においてもまだまだ未熟な部分が多々あり、今後この研修で得たものを活かしつつ、主体的に同言語に接する機会を作るよう努力していく必要がある。

## 参考文献

Takamasa Akiyama. 1996. Indonesia's Cocoa Boom. World Bank Policy Research Working Paper SeriesNo1580. Washington, DC. :The World Bank

小川忠. 1993. 『インドネシア：多民族国家の模索』岩波書店

William D. Sunderlin ほか. 2001 Economic Crisis, Small Farmer Well-Being, and Forest Cover Change in Indonesia. World Development Vol.29 No.5

JBIC. 1999. インドネシア コメ流通の現状と課題. JBIC Research Paper No.5



担当の先生による授業①



担当の先生による授業②



授業を受けた文学部の学舎